

博士論文要旨

体育授業における「リフレクション」の実態と変容に関する研究

広島大学大学院 教育学研究科 学習開発専攻

久保 研二

## 論文目次

### 序章 本研究の目的及び方法

#### 第1節 本研究における問題の所在

#### 第2節 研究の目的

#### 第3節 研究の方法と論文構成

### 第1章 「リフレクション」概念の検討

#### 第1節 研究の目的と方法

#### 第2節 「リフレクション」概念の検討

#### 第3節 体育科教育研究における「リフレクション」概念の検討

#### 第4節 「リフレクション」概念の検討から得た示唆と課題

### 第2章 大学学部生の体育授業における理論と実践を対象とした「リフレクション」の実態

#### 第1節 研究の目的と方法

#### 第2節 結果と考察

### 第3章 大学院生の体育授業における実践を対象とした「リフレクション」の変容

#### 第1節 研究の目的と方法

#### 第2節 結果と考察

### 第4章 「若手教師」の体育授業における実践を対象とした「リフレクション」の変容

#### 第1節 研究の目的と方法

#### 第2節 結果と考察

### 終章 成果と課題

## 序章 本研究の目的及び方法

### 第1節 本研究における問題の所在

現在、教師の専門職像に関して、「技術的熟達者」(technical expert)と「反省的実践家」(reflective practitioner)の二つの考えが対立関係、あるいは相互補完関係として並置され、教師教育改革の議論を枠づけている(石井, 2013)。この枠組みを提起したのが、Schön (Donald A. Schön)である。そして、Schönは、実践の状況が複雑であり、その実践の状況に働く高度で総合的な見識が必要な教師といった専門職においては、「反省的実践家」であることの必要性を説いている(Schön, 1983)。さらに、日本においても、このSchönの考えが佐藤学らによって日本に紹介され、大きく広がっていくことになった。佐藤は、専門職としての教師は、「反省的実践家」(reflective practitioner)としての成長が求められており、この「反省的実践家」の中核をなすものが「省察(reflection)」(「リフレクション」<sup>1</sup>)であるとしている(佐藤, 1993)。その後、日本教育大学協会が組織した「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトは、2004年にまとめた答申の中で、教員養成で養成すべき「実践的指導力」について、「教育実践を科学的・研究的に省察(reflection)する力」をその中軸に据えるとした(日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト, 2004)。この答申を契機に多くの教員養成を行っている大学において、「リフレクション」を新たに含んだカリキュラムの改革や授業改善が行われてきた。さらに、2012年8月に出された中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「学び続ける教員像」の確立が必要とされ、そのために理論と実践の往還によって「省察」(「リフレクション」)を繰り返すことが求められている。

このように、現在の教員養成や教師教育において「リフレクション」という概念は重要な意味を持ってきた。実際、体育科教育を含む様々な分野で、「リフレクション」に関する研究が数多くなされてきている。体育科教育においても、例えば、大学学部生に対して行った体育科に関する科目において実施した模擬授業を対象にした研究(藤田ほか, 2011; 木原ら 2007 など)や教育実習等で実際に児童生徒に教えた経験を対象にした研究(村井, 2015; 日野・谷本, 2009 など)、さらに「ベテラン教師」の授業実践を対象とした研究(厚東ら, 2003; 七澤ら, 2001 など)などが見られる。

しかしながら、この「リフレクション」という言葉は、教師教育を含む教育研究の様々な分野で用いられており、その定義についても複数存在している状況である。そのため、同じように「リフレクション」に焦点を当てていても、その意味する内容が異なってしまう。また、「リフレクション」という概念が持つ問題解決的な思考の要素が組み込まれていなかったり、「リフレクション」の機能自体を矮小化していたりする論文も見られる。そこで、「リフレクション」概念の検討を行うことで、教師教育に求められる「リフレクション」概念について整理することが喫緊の課題であると考えられる。

木原(2004)は、初任から教職経験5年未満の教師を「若手教師」、教職経験5年以上15年未満の教師を「中堅教師」、教職経験15年以上の教師を「ベテラン教師」と段階区分している。また、佐藤(1989)は、教師としての最初の数年間のくぐり方が生涯の教師としての仕事を決定づけるとしている。吉崎(1997)も、教師の成長にとって最初の3年間の決定的に重要であるとしている。しかしながら、「若手教師」の「リフレクション」の実態や変容について検討した論文は、管見の限り見られない。佐藤(1989)

---

<sup>1</sup> 「reflection」の訳語には、様々なものが存在している。しかし、それらの訳語はもともと日本語として存在している単語であり、それぞれから受ける印象について多少の違いを与えることがある。そこで、本研究では「reflection」をカタカナ表記の「リフレクション」と表すこととした。ただし、引用文については、原文のままとする。

や吉崎（1997）の指摘を踏まえると、「リフレクション」を行う力の形成を考えていく上で、「若手教師」の「リフレクション」の実態や変容を捉える研究が求められると考える。さらに、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006）では大学での教員養成課程において、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせることを求めている。加えて、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（2012）においては、養成段階から初任段階までを見通した教員育成の改善を図る必要性について述べており、養成段階に関しては修士レベル化を目指すことについても言及している。これらのことを踏まえると、「若手教師」につながる教員養成段階、さらには学部教員養成段階だけでなく大学院教員養成段階における「リフレクション」の実態や変容を捉える研究も重要になってくると考える。その上で、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」を行う力の形成を考えていくことが必要である。

## 第2節 研究の目的

第1節の問題の所在を受け、本研究の目的は、以下の2点とする。

- ①「リフレクション」概念の検討を通して、教師に求められる「リフレクション」概念の整理を行う。
- ②整理した「リフレクション」概念をもとに、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階の「リフレクション」の実態や変容について、事例的に明らかにする。

## 第3節 研究の方法と論文構成

本研究の目的を達成するために、以下の研究方法をとった。第1に、文献資料の読解と解釈という研究方法による理論的研究で「リフレクション」の概念整理を行った。第2に事例の観察で得た資料を記述し解釈する研究方法による実証的研究を行った。メリアム（2004）は、質的な事例研究を研究方法として採用するのは、仮説検証より洞察や発見や解釈に関心が向けられるときであると述べている。さらに、ある単一の現象や実体を集中的に注目することによって、調査者は、ある現象に特徴的な、重要な要因間の相互作用を示すことができることも述べている。本研究においては、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階、それぞれの対象者の一事例に注目することで、「リフレクション」の実態や変容の特徴について解釈を行いたいと考えたため、この研究方法を採用した。また、事例研究における「外的妥当性」を保障するために「読者あるいは利用者側の一般化可能性」（メリアム、2004）という立場をとることとした。この立場を取るためには、取り上げる事例や調査結果について詳細に記述（「豊かで分厚い記述」）し、読者が自身の置かれている状況と比較することが必要になってくる。そのため、事例研究の部分では、この「豊かで分厚い記述」を行えるように試みた。

本研究の本論は第1章から第4章によって構成されている。以下に、本研究の方法と論文構成を示す。

第1章では、目的①を達成するために、教師教育で用いられている「リフレクション」の概念について整理し、その整理された概念にもとづいて今まで行われてきた体育科教育研究における「リフレクション」概念の分類を行う。さらに、「リフレクション」概念の検討から得た示唆と課題について明らかにする。

第2章から第4章は、第1章での「リフレクション」概念の整理をもとに、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階の「リフレクション」の実態や変容について、事例的に明らかにしていく。第2章では、大学学部生を対象に体育科に関する科目の中で行った模擬授業の「リフレクション」および理論を対象とした「リフレクション」の実態について事例的に明らかにする。第3章では、

大学院生が行った体育授業の「リフレクション」の変容ならびにその要因について事例的に明らかにする。第4章では、「若手教師」の体育授業に関する「リフレクション」の変容から「授業力量」の成長ならびにその要因について事例的に明らかにする。

終章では、第1章から第4章までの結果を踏まえて、「リフレクション」を行う力の形成を目指していくうえで重要となる教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」の様態について考察を行う。さらに、本研究に残された課題を示す。

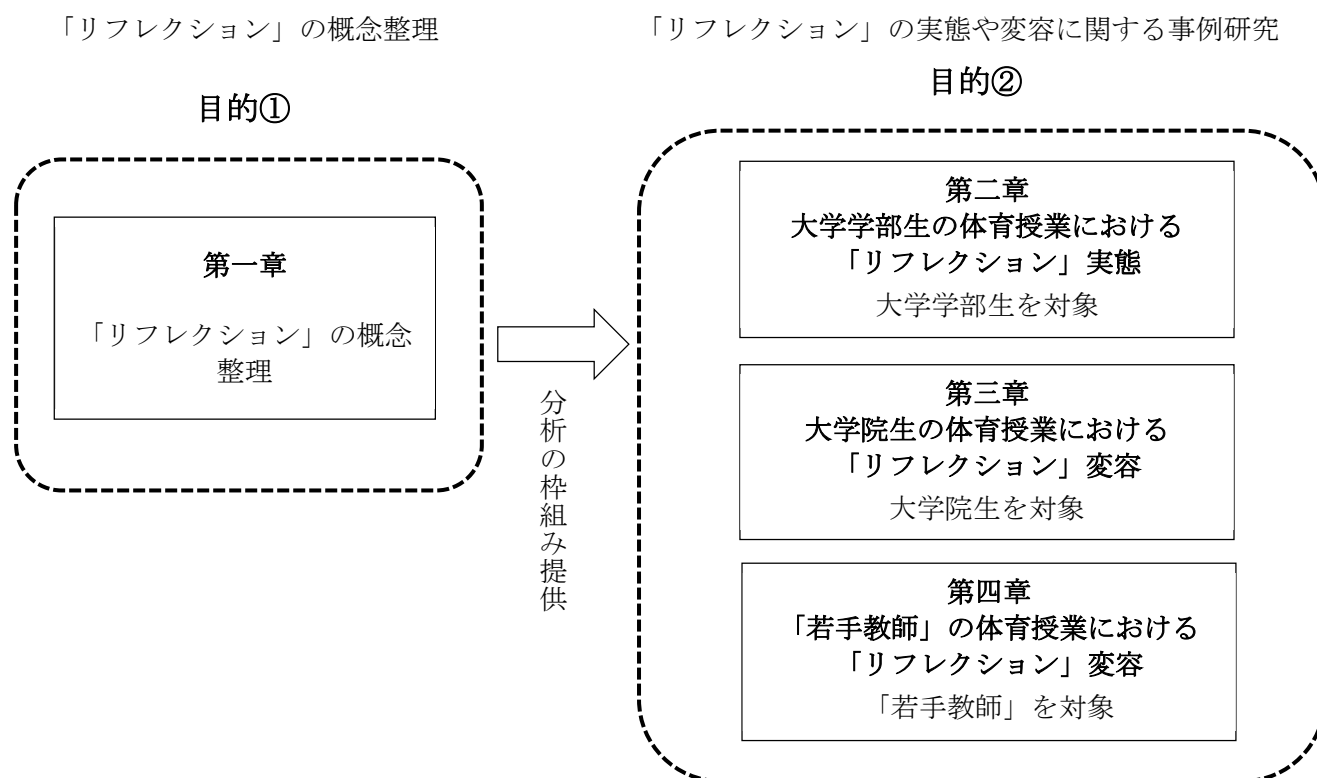


図1 各章と目的の関係

## 第1章 「リフレクション」概念の検討

第1章は、教師教育で用いられている「リフレクション」の概念について整理し、その整理された概念にもとづいて今まで行われてきた体育科教育研究における「リフレクション」概念の分類を行うことを目的とした。その結果、Schönは、「行為についてのリフレクション」の対象を「行為の中のリフレクション」に限定していたが、「行為の中のリフレクション」以外の事象に関しても「行為についてのリフレクション」を行っていくことの必要性について明らかにした。また、「リフレクション」の対象に関して、John Dewey (1933) や Korthagen (1985) の指摘を踏まえ、実践だけでなく、他者の実践、さらには理論も含むことの必要性にも言及し、それらを踏まえた形で「リフレクション」概念を図2のように整理した。

この整理した「リフレクション」の概念をもとに、体育科教育に関する研究を分類した結果、「行為についてのリフレクション」の中で「行為の中のリフレクション」を対象としたものとそれ以外を対象としたものを区別している論文は見当たらなかった。また、検討した研究の中には、自己の実践を対象とした「リフレクション」と他者の実践を観察するという学習を対象とした「リフレクション」が混在し

ている研究があることが分かった。さらに、理論を対象とした「リフレクション」に関する研究は見当たらなかった。加えて、「行為の中のリフレクション」を直接研究の対象とする研究も、今回取り上げた研究には見当たらなかった。これらの結果から、今回整理した「リフレクション」の概念にもとづき、教師教育研究や体育科教育研究で「リフレクション」に関する研究を行っていく際には、そこで分析の対象とする「リフレクション」の対象をあらかじめ区別しておく必要があると考えられた。

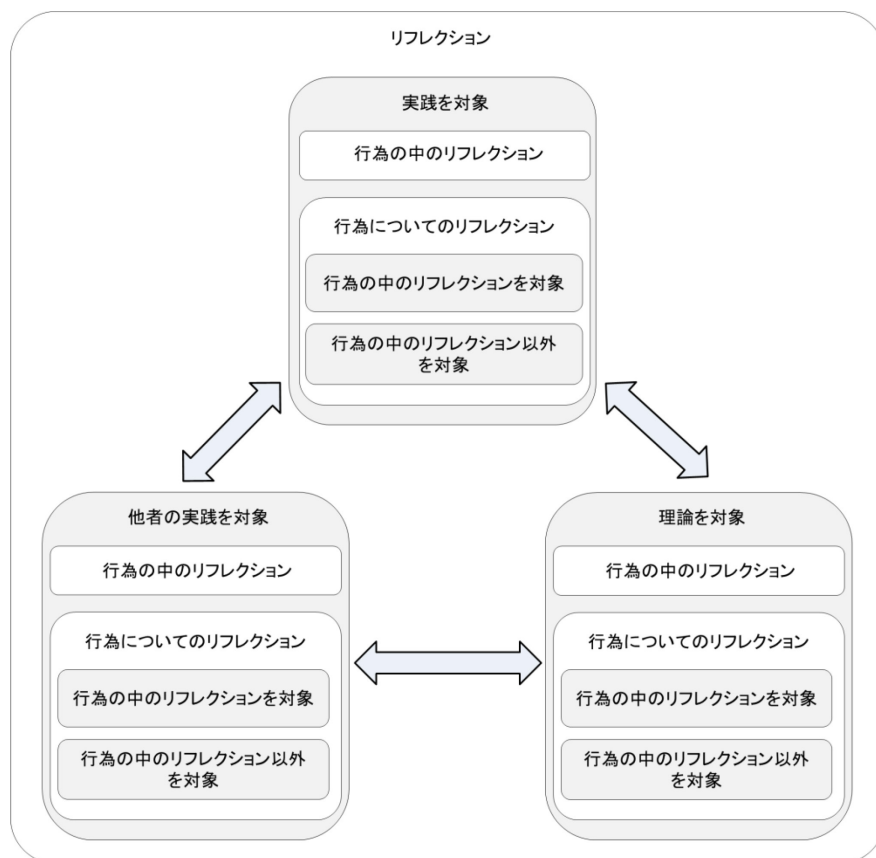


図2 本研究における「リフレクション」の概念図

## 第2章 大学学部生の理論と実践を対象とした「リフレクション」の実態

第2章は、教員養成課程における体育の授業科目である「保健体育科教育課程・教材構成論」においてポートフォリオを学生に作成させ、その意義について検討するとともに大学学部生の理論と実践を対象とした「リフレクション」の実態を把握することを目的とした。ここでは、図2に示した「理論を対象」とした「行為についてのリフレクション」と「実践を対象」とした「行為についてのリフレクション」の双方についての「リフレクション」の実態を把握することになる。

その結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) ポートフォリオを利用した理論を対象とした「リフレクション」を分析すると、多くの学生が、学習したことについて、抽象的ではあるものの木原（2004）が指摘する初任教師の課題である「問題の発見」をクリアし、「問題の解決」を示すことのできるレベルの「リフレクション」を行うことができていた。また、「リフレクション・シート」を活用した模擬授業での実践を対象とした「リフレクション」

に関しても、多くの学生が「問題の解決」を示すことのできるレベルの「リフレクション」を行うことができていた。インタビューの分析から、根拠のある「リフレクション」ができる点や自己の変容から「リフレクション」ができる点など、ポートフォリオが理論を対象とした「リフレクション」を行う際に有効に働いているということが推察できた。

(2) 模擬授業に関する実践を対象とした「リフレクション」のレベルが高い学生が、必ずしもポートフォリオを利用した理論を対象とした「リフレクション」のレベルが高いということではないことが明らかになった。そのため、授業科目の中で学習した理論を対象とした「リフレクション」を行う機会を保障していくことが必要になってくる。その際、理論を対象とした「リフレクション」を促す手段としてポートフォリオの活用を一つの方法として提案することができる。

これらの結果から、授業科目において学生にポートフォリオを作成させることは、根拠のある「リフレクション」が行えたり、自己ならびに学生の変容から「リフレクション」が行えたりすることで、学生の「リフレクション」を促すとともに、その質を高めることができ、学生の成長について意義のあることであると考えられた。しかしながら、授業科目においてポートフォリオを作成させることは、学生にも教員にも一定の負担になることは事実である。TA の活用や教職実践演習の履修カルテと関連させるなど、負担をどのように軽減していくかということが、今後の課題である。

### 第3章 大学院生の体育授業における実践を対象とした「リフレクション」の変容

第3章は、教員免許取得直後の大学院生 A の実践を対象とした「リフレクション」の実態ならびにその変容について明らかにすることを目的とした。そのため、大学院生 A が、小学校体育科において、一単元のマット運動の授業実践を、第1期と第2期の二度にわたって行った。第1期は、ティームティーチングの T2 として指導し、第2期は単独で学級全体を指導した。その授業実践の過程で教職経験14年目の体育専科 B 教諭からメンターとしての援助を受けることを通して、大学院生 A の「リフレクション」の焦点とレベルがどのように変容するのかを明らかにした。ここでは、図2に示した「実践を対象」とした「行為についてのリフレクション」の実態と変容を把握することになる。

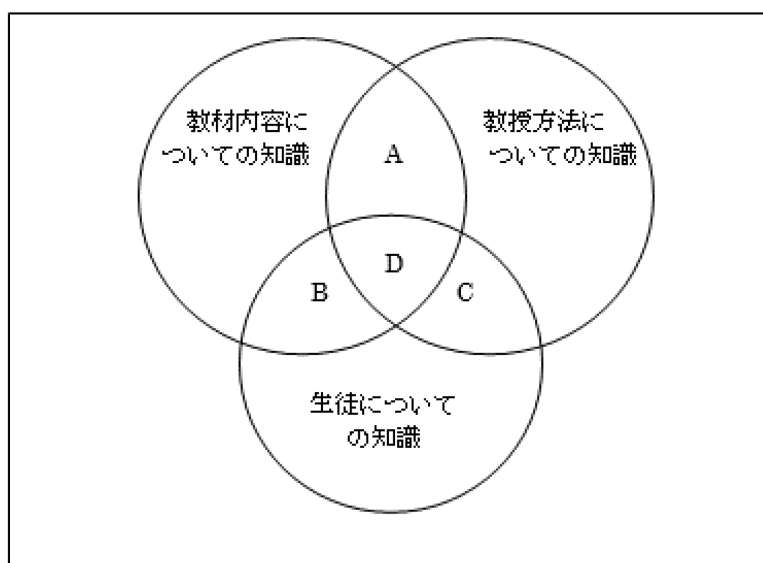


図3 授業についての教師の知識領域

その結果、「リフレクション」の焦点、レベルともに教師としての成長と捉えることができる変容を見て取ることができた。「リフレクション」の焦点としては、焦点を KJ 法で分類したカテゴリにおいて、カテゴリの重なり部分が生じたことが、注目すべき変容である。吉崎（1991）は、教師の知識領域について図 3 のような 7 つの知識領域を提案している。そして、その中で、A～D までの複合的な知識領域こそが、教師にとって必要であると論じている。今回の「リフレクション」の焦点に関するカテゴリの重なりは、図 3 で示した複合的な知識の活用を示すと考えられる。次に、「リフレクション」のレベルとしては、木原（2004）が指摘していた「問題の発見」から「問題の解決」へレベルが変化しつつあることが明らかになった。

また、このような成長と捉えることのできる「リフレクション」の変容を生んだ要因として、メンターである教諭と十分なメンタリング関係を築けたこと、また、メンターが常に非指示的な援助を行ってきたことの 2 つが指摘できた。

#### 第 4 章 「若手教師」の体育授業における実践を対象とした「リフレクション」の変容

第 4 章は、木原（2004）の定義する「若手教師」段階の教師（A 氏：以下 A と略す）の採用 1 年目の実践を対象とした「リフレクション」と、採用 4 年目の実践を対象とした「リフレクション」の実態と変容を明らかにし、「若手教師」の教職経験に伴う成長について事例的に考察を行うとともに、その変容をもたらした要因についても事例的に考察を行うことを目的とした。ここでは、図 2 に示した「実践を対象」とした「行為についてのリフレクション」の変容を把握することになる。

「リフレクション」の変容およびその変容から読み取れる教師としての成長に関しては、以下のようことが明らかになった。まず、「リフレクション」のカテゴリにおける割合の変容から、意図を明確にした指導計画が作成できるようになったり、授業の中でしっかりと意図を持った指導を行うことができるようになったりといった教師としての成長がみられた。次に、「子どもの実態を踏まえた教師の行動」という複合的な「リフレクション」のカテゴリが出現した。これは、第 3 章と同様に図 3 で示した複合的な知識に基づく「リフレクション」であると考えられる。このことから、次のような教師としての成長が推察された。1 つ目は、授業中の子どもの状況を即時的に評価するとともに必要な指導を考えるといった複合的な知識を活用した「行為の中のリフレクション」を実施し、そのことについて「行為についてのリフレクション」を行ったということである。2 つ目は、予想しなかった子どもの発言を、瞬時に自分の授業計画の中に位置づけ解釈して、その発言を取り上げるか否かを判断するという複合的な知識を活用した「行為の中のリフレクション」を実施し、そのことについて「行為についてのリフレクション」を行ったということである。ただし、「行為の中のリフレクション」により生まれた A 教師の行動については、適切な判断による行動と不適切な判断による行動の場合があった。3 つ目は、次時の授業課題を考えながら、次時の示範に取り上げようとする特定の子どものパフォーマンスのチェックを行うという、複合的な知識に基づく「リフレクション」を行ったことである。4 つ目は、授業中の子どもの学習の様子を先読みし、その実態に合わせて授業計画を考えるといった複合的な知識に基づく「リフレクション」を行ったことである。

また、若手教師 A の成長とみられる「リフレクション」の変容をもたらした要因は、以下の 4 点にまとめられた。

第 1 に、管理職の交代を契機として、授業へ関心を集中し、授業改善を意識することにより自己の実践を対象とした「リフレクション」を積み重ねることができたこと。



第2に、メンター教師Hが組織した学習会に参加し、体育科の水泳等の教材に関する知識、ハードル等の指導法に関する知識を習得するとともに、特定の子どもではなく「みんなができる体育」というメンター教師Hの考え方に会って、「できる子の体育」という考え方を揺さぶられたこと。

第3に、学校の同学年教師の同僚と日常的に子どもの学習に関する会話を行うことにより、子どもを理解する能力を向上させたこと。

第4に、体育の専門的知識の学習のために校外研修へ参加するとともに、他者の意見をもとにより深い自己の実践を対象とした「リフレクション」を行うために研究授業を積極的に実施したこと。

## 終章 成果と課題

本研究の目的は、以下の2点であった。

①「リフレクション」概念の検討を通して、教師に求められる「リフレクション」概念の整理を行う。

②整理した「リフレクション」概念をもとに、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階の「リフレクション」の実態や変容について、事例的に明らかにする。

これらの目的を達成するために行った本研究の成果をまとめる。まず、目的①に関しては、第1章で、教師教育で用いられている「リフレクション」の概念について整理し、その整理された概念にもとづいて今まで行われてきた体育科教育研究における「リフレクション」概念の分類を行った。このことにより、「リフレクション」に関する研究が、何を対象とした「リフレクション」であるのかを詳しく考察することが可能になると考える。次に、目的②に関しては、第2章から第4章で事例的に明らかにした。第2章では、大学学部生の実践を対象とした「リフレクション」ならびに理論を対象とした「リフレクション」の実態を明らかにした。第3章では、大学院生の実践を対象とした「リフレクション」の実態ならびにその変容を明らかにした。第4章では、「若手教師」の実践を対象とした「リフレクション」の実態と変容ならびにその変容の要因について明らかにした。これらの研究を通して、事例的ではあるが、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階、「若手教師」段階、それぞれの「リフレクション」の様態について明らかにすることができた。

そこで、これらの結果から、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」の様態について考察を行った。まず、体育授業における「リフレクション」は、吉崎（1991）の示す単一の知識をもとにした「リフレクション」から、徐々に複合的な知識をもとにした「リフレクション」を行えるようになってくると考察された。次に、「行為の中のリフレクション」に関する「行為についてのリフレクション」に関しては、大学学部教員養成段階、大学院教員養成段階では、あまりみられず、「若手教師」段階になって、少しずつ出現してくると考えられた。ただし、メンターによって、十分なメンタリングを受けた場合には、大学院教員養成段階においても、「行為の中のリフレクション」に関する「行為についてのリフレクション」を行っているのではないかと考えられるものが若干見られた。しかし、大学院教員養成段階における、「行為の中のリフレクション」に関する「行為についてのリフレクション」は、「問題の解決」に至るというよりは、「問題の発見」にとどまっているものであると考えられた。加えて、本研究では、「行為についてのリフレクション」の中で「行為の中のリフレクション」を対象としたものとそれ以外を対象としたものを明確に区別できていなかったため、大学院教員養成段階においては、推測の状況である。これらのことは、教員養成段階である大学学部生、大学院生から「若手教師」までの「リフレクション」を行う力の形成を図るための手段を開発する際の有益な情報となると考える。

最後に、本論文の課題について挙げる。まず、「リフレクション」の概念について整理を行ったが、本

論文で整理した他者の実践を対象とした「リフレクション」に関する研究を実施することができなかった。また、「行為についてのリフレクション」の中で「行為の中のリフレクション」を対象としたものとそれ以外を対象としたものを明確に区別した研究についても行うことができなかった。整理した「リフレクション」の概念に基づき、これらの「リフレクション」に関する研究を引き続き行い、「リフレクション」の概念を総合的に捉えることができるようにする必要がある。

次に、第二章から第四章までの研究は、それぞれ一事例を対象としたものである。このことは、成果でも述べたように教員養成段階である大学学部生、大学院生から「若手教師」までの「リフレクション」を行う力の形成を図るための手段を開発する際の有益な情報となる。しかし、それぞれ一事例であるため、「リフレクション」を行う力の形成の要因をより深く考察していくためには、より多様な状況の事例を検討していく必要がある。また、それぞれの事例をより深く理解できるための「豊かで分厚い記述」に関しても、極力行うように努めたが、まだ不十分な点があると考ええる。さらに、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」を行う力の形成を図っていくための手段については考察を行っていない状況である。今後、研究事例を増やすとともに、それぞれの事例間の対立点や共通点をより深く考察することを通して、教員養成段階から「若手教師」までの系統的な「リフレクション」を行う力の形成を図るための手段について検討していくことが必要であると考ええる。

【引用・参考文献】

- 秋田喜代美(1992)教師の知識と思考に関する研究動向. 東京大学教育学部紀 32, pp.221-232
- 秋田喜代美(1996)教師教育における「省察」概念の展開:反省的実践家を育てる教師教育をめぐって.  
森田尚人ほか編 教育学年報 5 教育と市場. 世織書房, pp.451-467
- 浅田匡 (1998) 教えることの体験. 浅田匡他編, 成長する教師. 金子書房, pp.174-184
- Bennett Neville, Dunne Elisabeth, Carre Clive (1999) Patterns of Core & generic Skills Provision in Higher Education. Higher Education 37, pp.71-93
- Bullock, A. A. and Hawk, P. (2002) Development a Teaching Portfolio : a guide for preservice and practicing teachers. Prentice-Hall
- Dewey,J. (1933) How we Think, Revised Edition, Boston:dc. Heath and Co.
- エドマン: 荘司雅子ほか訳 (1961) ジョン・デューイ: その哲学の現代への寄与. 刀江書院, pp.180-200
- 深見英一郎・七沢朱音・高橋健夫・岡出美則 (2001) 教師のフィードバック行動に対する反省的思考の効果.日本スポーツ教育学会第 20 回記念国際大会論集:369-374
- 福ヶ迫善彦・坂田利弘 (2007) 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要(32), pp.33-42
- 藤田育郎, 岡出美則, 長谷川悦示, 三木ひろみ (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—. 体育科教育学研究 27(1), pp.19-30
- Furlong, J. and Maynard, T. (1995) Mentoring student teachers: The growth of professional knowledge. Routledge
- 林伸晃 (2011) 小学校体育授業における教師の反省的思考に関する実践研究—アクション・リサーチの取り組みから見えてきたもの—. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集第 14 号, pp.107-116
- 日野克博(2006) 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期集中講義,初等教育実践研究 (体育), 配布資料
- 日野克博・谷本雄一 (2009) 大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造. 愛媛大学教育学部保健体育紀要 6, pp.41-47
- 久富善之(2010)教師の仕事の今日的難しさとそれを支えるもの. 久富善之・佐藤博編著, 新採教師はなぜ追いつめられたのか. 高文研
- 生田孝至 (2002) オン・ゴーイングによる授業過程の分析. 野嶋栄一郎編, 教育実践を記述する—教えること・学ぶことの技法. 金子書房, pp.155-174
- 石井英真 (2013) 教師の専門職像をどう構想するか: 技術的熟達者と省察的実践家の二項対立図式を超えて. 教育方法の探究 16, pp.9-16
- 岩川直樹 (1994) 教職におけるメンタリング. 稲垣忠彦ほか編, 日本の教師文化. 東大出版会, pp.97-107
- 岩田昌太郎・久保研二・嘉数健悟・竹内俊介・二宮亜紀子 (2010) 教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討—「リフレクション」を促すためのシート開発—. 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域 59, pp.329-336
- Jones and Shelton (2006) Develpoment Your Portfolio, Routledge.
- 笠原和彦・住野好久・上村弘子・山崎光洋・高旗浩志・黒崎東洋郎・高塚成信・高橋香代 (2011) 「教職

- 実践ポートフォリオ(第2版)」の開発. 日本教育大学協会研究年報 29, pp. 91-105
- 木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定(2007) 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部学習開発関連領域 56, pp.85-91
- 木原成一郎(2007) 初任教師の抱える心配と力量形成の契機. グループ・ディダクティカ編, 学びのための教師論. 勁草書房, pp.29-55
- 木原成一郎・林楠(2010) イングランドの現職教育に関する研究. 学校教育実践学研究 16, pp.89-100
- 木原俊行(2004) 授業研究と教師の成長. 日本文教出版
- 岸一弘(2013) 小学校教員養成課程の体育科目における模擬授業の検討—受講生の「授業省察力」の変容に関して—. 共愛学園前橋国際大学論集第 13 号, pp.39-49
- Korthagen,F.A.J. (1985) Reflective teaching and preservice teacher education in the Netherlands. *Journal of Teacher Education*, 36(5), pp.11-15
- Korthagen,F.A.J. (2008) *Linking Practice and Theory*. Routledge.
- 厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘・辻延浩(2003) 小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究.教育実践学論集 5, pp.99-110
- 厚東芳樹・梅野圭史・林修・高村賢一・上原禎弘(2005) 小学校体育授業に対する教師の反省的思考に関する研究—高学年担任教師の学習成果(態度得点)の相違に着目して—. スポーツ教育学研究 25(2), pp.87-99
- 厚東芳樹・梅野圭史・山口孝治(2007) 小学校体育授業に対する教師の反省的思考に関する研究—低学年(2・3年生)担任教師の場合—. 教育実践学論集(8), pp.187-196
- 厚東芳樹(2011) 教職経験年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響—小学校低学年担任の男性教師について—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要 (112), pp.59-71
- 久保研二・木原成一郎・大後戸一樹(2008) 小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察. 体育学研究 53(1), pp.159-171
- 松崎邦守・北條礼子(2007) 教育実習ポートフォリオの適用の効果に関する事例研究. 日本教育工学会論文誌, 31: 157-160
- 丸山芳郎・永木耕介・湯浅昭司(1989) 体育授業における教授技能の変容過程(II)—模擬授業における「反省的教授練習」を中心に—. 上越教育大学研究紀要第 3 分冊自然系教育生活・健康系教育 8, pp.65-76
- Maynard, T. (1997) *An introduction to primary mentoring*. Cassell
- 森勇示(2009) 体育授業における教師の実践的知識の形成過程—教師との対話事例を手がかりに—. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 (12), pp.207-212
- 宮田仁(2003) Web ベースのティーチング・ポートフォリオを活用した授業改善システムの開発と試行—教育実習前学生のマイクロティーチングを事例として—. 日本教育工学雑誌 27, pp.61-64
- 文部科学省中央教育審議会(2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)
- 文部科学省中央教育審議会(2006) 今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)
- Moon Jennifer (2004) *A Handbook of Reflective and Experiential Learning: Theory and Practice*, Routledge.
- 村井潤(2015) 小学校教育実習における実習生の発言内容に関する事例研究. 体育学研究 60(1), pp.249-

- 村井潤・木原成一郎・大後戸一樹（2011）小学校教育実習における指導の特徴に関する研究—実習生の実態を踏まえた反省会での指導に着目して—．体育学研究 56(1), pp.173-192
- 村松和彦・南伸昌（2011）教職実践科目におけるポートフォリオ学習の試行．宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 34, pp.33-38
- メリアム：堀薫夫ほか訳（2004）質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ．ミネルヴァ書房
- 永田智子・鈴木真理子・森広浩一郎（2006）デジタル・ティーチング・ポートフォリオとしてのブログの可能性．日本教育工学会論文誌 29, pp.181-184
- 長田則子・梅野圭史・厚東芳樹（2010）体育授業における教師の「感性的省察」の実体とその深化．体育・スポーツ哲学研究 32 - 2, pp.99-118
- 中井隆司（2005）広島大学大学院教育学研究科博士課程前期集中講義,初等教育実践研究（体育）, 配布資料
- 中井隆司・澤田あかね（2007）小学校体育授業への取り組みに対する自己診断表作成の試み—反省的実践家として自己成長できる教師を目指して—．教育実践総合センター研究紀要(16), pp.31-39
- 七沢朱音・深見英一郎・高橋健夫・岡出美則（2001）体育授業に対する教師の反省的思考の変容過程について:インストラクション場面とフィードバックに着目して.日本スポーツ教育学会第 20 回記念国際大会論集, pp.365-368
- 七沢朱音（2007）教授技術の向上を目指した反省的授業実践—保健体育科教育実習生による実践を例に—．日本教育大学協会研究年報 25, pp.161-170
- 日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト(2004)「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討—『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案—」
- 大庭昌昭(2006)体育専攻学生を対象とした授業リフレクションについて.教育実践総合研究(5), pp.105-108
- Rogers, Russel, R (2004) Reflection in Higher Education: A Concept Analysis. Innovative Higher Education.26(1), pp.37-57
- 澤本和子・田中美也子（1996）教師の成長とネットワーク—授業でつなぐネットワーク—. 藤岡完治・澤本和子編著, 授業で成長する教師. ぎょうせい, pp.127-137
- 佐藤学（1989）教室からの改革. 国土社
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美（1990）教師の思考様式に関する研究(一): 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に. 東京大学教育学部紀要 30, pp.177-198
- 佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹・吉村敏之（1991）教師の思考様式に関する研究(二): 思考過程の質的検討を中心に. 東京大学教育学部紀要 31, pp.183-200
- 佐藤学（1993）教師の省察と見識: 教職専門性の基礎. 日本教師教育学会編, 日本教師教育学年報第 2 号. 日本教育新聞社, pp.20-35
- 佐藤学（1997）教師というアポリア. 世織書房
- 佐藤学（2001）訳者序文. ドナルド・ショーン: 佐藤学・秋田喜代美訳, 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える. ゆみる出版
- Schön,D.A. (1983) The reflective practitioner, How professionals think in action, Basic Books.

- Schön,D.A. (1987) Educating the reflective practitioner,Jessey-Bass.
- Shulman, L.S. (1987)Knowledge and teaching: Foundation of the new reform. Harvard Education Review57 (1) , pp.1-22
- 鈴木直樹 (2007) 小学校体育の授業改善の取り組みの現状とその方法の実態に関する報告—よりよい体育授業を目指して—. 埼玉大学紀要教育学部 56(1), pp.233-244
- 高村 賢一・厚東芳樹・梅野圭史・林修・上原禎弘 (2006) 教師の反省的視点への介入が授業実践に及ぼす影響に関する事例検討—小学校体育授業を対象として. 体育科教育学研究 22(2), pp.22-43
- Tsangaridou, N & O'sullivan, M.(1994) Using Pedagogical Reflective Strategies to Enhance Reflection Among Preservice Physical Education Teachers. Journal of Teaching in Physical Education.14, pp.13-33
- 山口孝治 (2012) 体育授業における教師の反省的思考の変容に関する実践的研究—授業中の「出来事」への気づきに着目して—. 佛教大学教育学部学会紀要 11, pp.41-52
- 谷塚光典・東原義訓 (2002) ティーチング・ポートフォリオを活用した教育実習事前・事後指導の実践. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 3, pp.127-134
- 谷塚光典・東原義訓 (2009) 教員養成初期段階の学生のティーチング・ポートフォリオのテキストマイニング分析 :INTASC 観点「コミュニケーション」に関するリフレクションの記述から. 日本教育工学会論文誌 33, pp.153-156
- 吉崎静雄 (1991) 教師の意思決定と授業研究. ぎょうせい
- 吉崎静雄 (1997) デザイナーとしての教師, アクターとしての教師. 金子書房
- 吉崎静雄 (1998) ひとり立ちへの道筋. 浅田匡ほか編, 成長する教師. 金子書房, pp.162-173
- Zeichner, K. and Wray, S. (2001) The teaching portfolio in US teacher education program : What we know and what we need to know, Teaching and Teacher Education. 17(5) , pp.613-62